役　員　名　簿

理事・監事

（平成 21 年 6 月 1 日現在）

役職名	氏　　名	役　　職
理　事　長	持　田　　勲	工学博士　九州大学名誉教授　九州大学特任教授（炭素資源国際教育研究センター） （独）科学技術振興機構研究成果活用プラザ福岡館長
副理事長	角　　敬　之	前福岡県環境部長
副理事長	松　藤　泰　典	工学博士　九州大学名誉教授　北九州市立大学副学長
常任理事	川　野　田實夫	大分大学教育福祉科学部教授
常任理事	楠　田　哲　也	工学博士　北九州市立大学国際環境工学部教授 九州大学名誉教授　九州大学特任教授（工学研究院）
常任理事	西　村　正　幸	九州電力（株）執行役員　環境部長
常任理事	百　島　則　幸	理学博士　九州大学アイソトープ総合センター教授
理　　事	浅　野　直　人	福岡大学法学部教授
理　　事	小　山　次　朗	農学博士　鹿児島大学水産学部教授・海洋資源環境教育研究センター長
理　　事	島　岡　隆　行	工学博士　九州大学大学院工学研究院教授
理　　事	関　根　雅　彦	工学博士　山口大学大学院理工学研究科教授
理　　事	早　瀬　隆　司	工学博士　長崎大学環境科学部教授
理　　事	松　岡　信　明	理学博士　当協会事業本部長
理　　事	矢　野　健　二	当協会経営本部長
理　　事	矢　幡　　久	農学博士　九州大学名誉教授
監　　事	千　葉　　兆	（株）福岡銀行監査役
監　　事	甲　能　市　郎	公認会計士　甲能公認会計士事務所

評議員・顧問

役職名	氏　　名	役　　職
評　議　員	有　川　節　夫	理学博士　九州大学総長
評　議　員	池　田　元　輝	農学博士　九州大学名誉教授
評　議　員	内　海　英　雄	薬学博士　九州大学副学長・大学院薬学研究院教授
評　議　員	薛　　孝　夫	農学博士　九州大学大学院農学研究院准教授
評　議　員	中　野　勝　之	工学博士　福岡大学工学部教授
評　議　員	中　村　　明	九州電力（株）　執行役員　原子力管理部長
評　議　員	西　田　哲　明	理学博士　近畿大学産業理工学部教授・九州リエゾンセンター長
評　議　員	野　中　敬　正	工学博士　熊本大学名誉教授
評　議　員	速　水　　洋	工学博士　九州大学名誉教授
評　議　員	樋　口　壯太郎	工学博士　福岡大学工学部教授
評　議　員	二　渡　　了	工学博士　北九州市立大学国際環境工学部教授
評　議　員	宮　島　　徹	理学博士　佐賀大学理工学部教授
評　議　員	森　本　　廣	（財）九州経済調査協会理事長
評　議　員	柳　　哮	理学博士　九州大学名誉教授
顧　　問	竹　下　健次郎	工学博士　九州大学名誉教授　元当協会副理事長
顧　　問	花　嶋　正　孝	工学博士　福岡大学名誉教授　（財）福岡県環境保全公社リサイクル総合研究センター長

－編集後記－

この１年間は経済に振り回された１年であったと言ってよいでしょう。国民一人ひとりが何らかの形で金融不況･経済不況の影響を受けています。また、原油価格も乱高下しました。エネルギー資源の問題についても、なかなか先が見通せない状況ではないかと思われます。よくＥＥＥ（Economy, Energy, Environment）と言われるように、環境問題は経済とエネルギーとに密接にリンクしております。これまでは経済発展やエネルギー消費と環境保全のバランスをどうするか、すなわち持続可能な発展という視点でＥＥＥが論じられてきました。しかし百年に一度という経済危機にあって、地球温暖化対策をバネにして経済を立て直そうという動きが出てきました。このことが人類にとって真によいことなのかどうか、現時点では誰も答えを出せないのではないでしょうか。とにかくその方向に動き出したことは確かなようです。

(財)九州環境管理協会が関係している分野でも少しずつ変化の兆しがあります。ごみを扱う技術者の集団である「廃棄物学会」が「廃棄物資源循環学会」に名称を変更しました。ごみをどう処分するかではなく、どのように活用するかということにメインテーマが変わったということでしょう。昨年改正された食品リサイクル法では食品関連事業者に一層高い廃棄物資源化（リサイクル）率を要求していますが、究極的には 100%資源化を目指す動きではないでしょうか。

地球温暖化対策では、昨年の洞爺湖サミットで、2050 年を目指した温室効果ガス削減目標について一定の合意が形成され､2020 年の中期目標についても今年の第 15 回締約国会議（ＣＯＰ15，コペンハーゲン）での合意を目指して作業が進められています。そして、従来否定的に受け止められていた原子力発電が、中・長期の対策手段の一つとして合意されたのは特筆すべきことではないかと思います。欧州では脱原子力を標榜していた国が次々と方針転換し、中国では新・増設が加速し、米国やアジア各国では新設計画が目白押しとなってきました。このような状況の中で、原子力の安全管理はますます重要な課題となってきます。

『環境管理第 38 号』では、巻頭言として、大分大学学長の羽野忠先生に、環境問題解決における産学官民連携、ＮＰＯ活動、国際協力、大学間連携の重要性について、大分での事例を挙げて述べていただきました。特に先生が力を入れておられる「大分水フォーラム」の活動が学生や県内ＮＰＯを巻き込んで活発に実施されている様子は、各地域の関係者の参考になるのではないかと思います。

論説では、まず近畿大学の西田哲明先生に資源循環の視点での寄稿を頂きました。本来ごみとなるべきガラスくずと石炭灰から、効率の良い環境浄化材を生成するというご研究は、まさに循環型社会に合致した内容です。つづいて鹿児島大学の小山次朗先生に水産生物への化学物質の影響について述べて頂きました。近年環境中での化学物質濃度について、人間への影響のみならず生物・生態系への影響も含めて評価・対策することが要求されています。先生のご研究は今後ますます重要になってくると思います。

特別寄稿論文では、鹿児島県環境保健センターの吉國謙一郎先生に、入浴施設のレジオネラ属菌対策について述べて頂きました。レジオネラ属菌感染による被害は毎年のように報告されており、この対策は衛生管理上重要な問題です。先生のご研究では、レジオネラ属菌の消毒に鹿児島県の特有資源であるシラスを活用され、効果を確認されております。衛生管理上の重要なご研究であると同時に、資源循環のご研究でもあると思いました。

当協会の職員から研究報告 2 編、技術報告１編、新規業務紹介１編を掲載させて頂きました。いずれも自主研究として日常の業務にプラスして実施しているものです。研究報告の環境省及び福岡市環境局様のご協力の下に行った都市部における熱環境研究（ヒートアイランド研究）では、観測データの解析

によって芝生（緑地）の気温低減効果を確認し、低減のメカニズムについても知見が得られました。同じく研究報告の赤潮発生予測の研究では、諫早湾を含む有明海の赤潮発生に海域への淡水流入量が密接に関係していることを解明し、このことによる赤潮発生予測の可能性を指摘しました。技術報告の佐賀県立九州シンクロトロン光研究センターを利用した研究では、飛灰中の鉛の状態分析の可能性について一定の成果が得られ、リサイクル資源の環境安全性評価などへ応用できる可能性が出てきました。新規業務紹介では、生物多様性地域戦略策定について当協会の取組みの方向性を紹介しました。

昨年、本誌第 37 号に福岡市の樋脇弘先生に鳥インフルエンザを始めとするウィルス性感染症について論説を頂きました。その中で「パンデミック」への言及もありました。１年経った今、世の中はその「パンデミック」に直面しております。あらためて先生方の先見に感服すると同時に、ご執筆いただいた内容が広く一般に読んでいただくことを期待しています。

最後に、本誌のためにご寄稿いただきました先生方と職員の皆様に心から感謝申し上げます。

（編集担当：松岡）